

可能表現の対象格標示「ガ」と「ヲ」の交替

青木ひろみ*

キーワード：可能表現，対象格標示，他動性，参加者

要旨

日本語における可能表現の対象格標示には、「英語が話せる」「英語を話せる」のように「ガ」と「ヲ」2つの用法がある。日本語学習者用のテキストでは、可能表現の対象格について「ガ」で標示されているものが多い。しかし、実際の言語使用や書かれた資料では両方共用いられる一方で、このような対象格の交替が自由に起きるとはいう訳ではないのも事実である。これまでの研究では、状態述語文の意味的な制約について、[±状態的]、「自発性」と「使役性」、また“spontaneous”と“controlled”という用語で説明されているが、いずれも対象格表示の一側面を捉えたものである。

本稿では、Hopper & Thompson (1980)をはじめとする「他動性 (transitivity)」の研究から、特に、主体と対象という「参加者 (participants)」の特徴として、「動作主性 (agency)」と「被作用性 (affectedness of object)」に関わる要因から考察した。結果、可能表現に対象格「ヲ」が用いられるのは、有意志性 (volitionality)、動性 (kinesis)、動作、行為の完結を表すアスペクト的特徴 (aspect) という、それぞれの高い要因に帰着する。このような結果から、可能表現が状態述語文であるという理由で、他動詞構文の対象格「ヲ」が「ガ」に変わるという説明だけでは十分とは言えない。また、日本語学習者用のテキストにおいても、対象格の提示の仕方や、それに付随した練習問題の取り扱い方にも検討が求められるのではないかと考える。

1. はじめに

初級の日本語学習者が学ぶ状態述語文には、次の(1)好悪表現、(2)願望表現、(3)可能表現のように、対象格標示「ガ」と「ヲ」両方とも用いられるものがある。

- (1) 私は太郎 {が/を} 好きだ。 (好悪表現)
- (2) 私はパソコン {が/を} 買いたい。 (願望表現)
- (3) 私は英語 {が/を} 話せる。 (可能表現)

上記の構文における対象格標示について、日本語学習者用の主なテキストを見ると表1のように

*AOKI Hiromi：神田外語大学外国語学部准教授

表1 日本語初級テキストの対象格標示

	(1) 好悪表現	(2) 願望表現	(3) 可能表現
1. 日本語初歩 (1981)	ガ	ガ (ヲ)	ガ
2. 初級日本語 (1994)	ガ	ガ (ヲ)	ガ
3. みんなの日本語初級 I・II (1998)	ガ	ヲ (ガ)	ガ
4. 初級日本語げんき I・II (1999)	ガ	ヲ (ガ)	ガ (ヲ)
5. 新文化初級日本語 I・II (2000)	ガ	ガ	ガ
6. 新装版日本語初級 I・II (2002)	ガ	ガ	ガ
7. ICJ I・II (1971)	ガ	ガ	ガ
8. JBP I (1984)・II (1990)	ガ	ヲ (ガ)	ガ (ヲ)
9. IMJ (1987)	ガ	ガ	ガ
10. SFJ I・II (1991)	ガ	ガ (ヲ)	ガ

なる。この表を見る限りでは、(1)好悪表現については全て「ガ」格で標示している。一方、(2)願望表現については、「ガ」格または「ヲ」格のどちらかを挙げたうえで併用する形と、「ガ」格のみで標示しているものがある。また、(3)可能表現については、「ガ」格標示を採っているものが多いということが分かる¹。

このような状態述語文の意味的な制約について、これまでの研究では、[±状态的 (stative)] (久野 1973)、「自発性」と「使役性」(Makino 1975-1976, 牧野 1978, 1996)、“spontaneous”と“controlled” (McGloin 1989) 等という用語で説明されているが、いずれも対象格標示に関わる一側面を捉えたものである。本稿では、(3)に挙げた可能表現の対象格の交替について、Hopper & Thompson (以下、H&T) (1980) をはじめとする「他動性 (transitivity)」の研究から、主体と対象という「参与者 (participants)」に焦点を当て考察した。結果、可能表現における「ヲ」格の適用は、「動作主性 (agency)」と「被作用性 (affectedness of object)」双方に関わる複数の要因に帰着するといえる。他動性について述べる前に、まず先行研究における可能の対象格標示の制約について概観する²。

¹ 表1に挙げたテキストでは、願望表現の対象格標示について統一されていないが、庵 (1995) では「典型性」と「他動性」という要因を挙げ、「ヲ」を無標、「ガ」を有標と分析している。

² 渋谷 (1993: 44) では可能表現の格パターンを制約する条件として、(1)統語的な制約 (表層格による一般的制約)、(2)意味的な制約 (動作主性との相関、可能の意味タイプとの相関)、(3)談話的制約 (述語動詞との距離、言語運用レベルにおける談話制約) を挙げている。

2. 先行研究

2-1. 統語的制約

可能表現における主語と対象格には、下記の(4)に示した3通りのパターンがある³。

- (4) a. [ニ ガ] 格：[太郎に 英語が 話せる] こと
 b. [ガ ガ] 格：[太郎が 英語が 話せる] こと
 c. [ガ ヲ] 格：[太郎が 英語を 話せる] こと

柴谷 (1978: 257) では、(5)のような深層構造から「太郎が英語を話せる (4c)」という格標示が作られる過程を次のように説明している。(5)の基底構造は、まず「同一名詞句削除規則」及び「述語繰り上げ規則」の適用を経て(6)のような中間構造が作られ、さらに「主語助詞規則 (ア)」と「直接目的語助詞規則 (ア)」により(7a)の構造が派生される。次に、「直接目的語助詞規則 (イ)」により、(6)に主格目的語の対格化が適用された場合には(7b)の構造となる。しかし、これは「文」は少なくとも一つの主格名詞節を含んでいなければならない」という「主格保持の原則」に反することから、「主語助詞規則 (イ)」により主格化しその結果(8)が派生されるというものである⁴。

- (5) [太郎 [太郎 英語 話す] れる]
 主語 主語 直接目的語 ⎧ 与格主語
 ⎨ 状態述語
- (6) [太郎 英語 話せる]
 (7) a. [太郎に英語が話せる]
 b. [太郎に英語を話せる]
 (8) 太郎が英語を話せる。(= (4c))

次に、意味的側面から状態述語文の格標示について包括的に説明している久野 (1973), Makino (1975-1976), 牧野 (1978, 1996), McGloin (1989) の先行研究を中心に見ていく。

2-2. 意味的制約

まず久野 (1973: 80-84) では、意味上 [- 状态的] な動詞は目的語を表す格助詞に「ヲ」、 [+ 状态的] な動詞は「ガ」を用い、派生动詞が [+ 状态的] か [- 状态的] かは、付加された派生接辞の意味特徴によるものとする。(9a) 可能の「レ / ラレ」と(9b) 願望の「タ (イ)」は [+ 状态的] で、(10a) 使役の「サセ」と(10b) 受身の「ラレ」は [- 状态的] である。

- (9) a. 太郎は日本語 {を / が} 話せる。(可能)

³ 統語的制約については、Kuno (1973), 井上 (1976a) 他参照。

⁴ 「主語助詞規則」「直接目的語助詞規則」は、柴谷 (1978: 235-236) 参照。

- b. 僕はご飯 {を/が} 食べたい. (願望)
 (10) a. 太郎は花子に本を読ませる. (使役)
 b. 太郎は花子に殺される. (受身)

(9)の可能表現と願望表現に「ヲ」「ガ」の両方が用いられるのは、「話す」「食べる」は[-状态的]であることから、(11)のように目的語を表す名詞句が動詞の語幹(「話す」「食べる」と結び付くと感じられる場合、「ヲ」が用いられる。また、(12)のように目的語が派生系全体(「話せる」「食べたい」)の目的語とすると感じられる場合には、「ガ」が用いられるとしている。

- (11) a. (日本語+話す)+レル
 b. (ご飯+食べる)+タイ
 (12) a. (日本語)+(話す+レル)
 b. (ご飯)+(食べる+タイ)

また、派生接辞は独立動詞として用いることがない形式の場合にのみ、目的格の選択に関与する。「書いている、書いてみる、書いてしまう」等、合成動詞の状態性は補助動詞の状態性と一致するが(「いる」は[+状态的]、「みる、しまう」は[-状态的])、合成形の目的格は語幹動詞の状態性の有無によって決まる。

上記のような動詞と派生接辞からの説明に対し、Makino (1975-1976)、牧野 (1978, 1996)の説明では、「ガ」可能形は、(13)のような「自然に、すらすら、とめどもなく」という副詞(句)を用いた表現や(14)のような自発的な動詞「なる」と共起する。

- (13) a. 太郎は自然に(すらすら、とめどもなく) 詩 {が/???を} 書ける。
 b. なんとなく 筆を動かしているうちに絵 {が/*を} 描けてしまった。
 (14) a. 次第に太郎はモーツアルト {が/???を} 弾けるようになった。
 b. もうちょっとで難しい問題 {が/*を} 解けるようになった。(牧野 1978: 194, 196)

これは「元来自動詞の主語をマークする「が」のほうが他動詞の目的語をマークする「を」より自発性が強い(牧野 1996: 159)」という考えに基づいているが、(15)のような自発性が高いとする例には、疑問点も見られる。

- (15) a. モーツアルトは天才だから、曲 {が/?を} 次から次にとめどもなく作れた。
 b. 僕は君 {が/?を} 好きで好きでたまらないんです。
 c. 私はラーメン {が/?を} 食べたくて、食べたくて。(牧野 1996: 98)

例えば、(15a)を「モーツアルトは天才だから、次から次にとめどもなく曲 {が/を} 作れた」とすると、「ガ」「ヲ」ともその適性は変わらないように思われる。また、(15b)の対象を有生(animate)の「君」から無生(inanimate)の「ビール」等に置き換えると、「ヲ」格は適用されなくなる等の点について、自発性からは説明ができない。

一方、(16)のように直接目的語の再帰代名詞「自分」が「ガ」格とは共起しにくいのは、主語

の最大限のコントロールを受けるからであると説明している。

(16) a. 太郎 *i* は 自分 *i* {? ? ? が / を} いつわれる男だ。

b. 太郎 *i* は 自分 *i* {? ? ? が / を} 押さえられる男だ。 (牧野 1978 : 195)

しかし、(16)の「自分」は、「友達」や「他人」等、他の名詞(句)に置き換えても対象格に変化は生じないという点について、使役性からは明らかにならない。つまり、対象格の交替は、自発性あるいは使役性というだけでは十分に説明ができず、動作主性と被作用性双方に関わる要因について考察する必要がある。

一方、McGloin (1989) では“spontaneous”と“controlled”という用語からも分かるように、基本的に先述の Makino (1975-1976) 他の分析と共通している点が多い。願望表現では(17)のような「ヲ」格の適用例を挙げている。また、可能表現については、(18a)のような「ガ」格の適用例と(18b)のような「ヲ」格の適用例を挙げ、どちらの格助詞が選択されるかは、話し手が動作や希望をコントロールできるか否かによるとしている。

(17) a. 試験の前に宿題 {を / *が} してしまいたい。

b. お客さんが来る前におかし {を / *が} 買っておきたい。

(18) a. 毎日やっているうちに自然に字 {が / *} を書けるようになった。

b. 三年生が終わるまでに当用漢字 {? ? *が / を} 書けるようにします。

(McGloin 1989 : 72-73)

牧野 (1978, 1996) 及び McGloin (1989) では、コントロールの定義や動詞の特徴、また後接表現について、特に説明はない。久野 (1973) では、独立動詞の後接表現は対象格に影響を与えないとしているが、動作性と被作用性の関係は、(17)の「～てしまう」や「～ておく」、また(18)の「なる」に対する「する」等にも現れていることから、本稿でも考察の対象とする。

以上、先行研究におけるそれぞれの指摘は、対象格標示の一側面を示しているが、問題点も残ることから、他動性とその要因から見ていく。

3. 他動性のプロトタイプ

他動性とは、自動詞文との関係も含めて他動詞文に関する言語現象一般を指して用いられる(中村 2004, 角田 2005 他)。H&T(1980)をはじめ、角田(1991), Jacobsen(1992), Givón(1995), 山梨 (1995), 山本 (2002), 中村 (2004) 他多くの研究がある。他動性についての先駆的研究として知られている H&T (1980) では、下記の表 2 のように 10 の要因を挙げ、「他動性の仮説(transitivity hypothesis)」としている⁵。例えば、“Jerry likes beer.”と“Jerry knocked Sam down.”のような文を比べると、後者の「殴り倒した」という行為では、(19)の a. participants の他に、b. kinesis, c. aspect, d. punctuality, i. affectedness of O, j. individuation of O という複数の要因にお

表2 Hopper & Thompson (1980 : 252)

(19)	HIGH	LOW
a. Participants	2 or more participants, A and O	1 participant
b. Kinesis	action	non-action
c. Aspect	telic	atelic
d. Punctuality	punctual	non-punctual
e. Volitionality	volitional	non-volitional
f. Affirmation	affirmative	negative
g. Mode	realis	irrealis
h. Agency	A high in potency	A low in potency
i. Affectedness of O	O totally affected	O not affected
j. Individuation of O	O highly individuated	O non-individuated

(A = agent, 動作主 ; O = object, 目的語)

いて、前者より高い他動性を示すとしている。一方、表2の各要因については、意図性と動作主性等に重複が見られる(山梨1995:236)、また意図性とコントロールを区別する必要がある(角田2005:56)等、様々な指摘や提案もされている⁶。

本稿では、可能表現の対象格標示に関わる要因を、(19)の「動作主性の高さ (h. A high in potency)」と「被作用性の高さ (i. O totally affected)」と捉え、主体の意図性を表す「有意志性 (e. volitionality : volitional / non-volitional)」、動詞の特徴を表す「動性 (b. kinesis : action / non-action)」, また、動作、行為の完結を表す「アスペクト (c. aspect : telic / atelic) 的特徴」から考察する⁷。尚、願望表現や可能表現では、対象と述語の間に他の長い要素が介在すると、主体か対象かの判断が曖昧になるのを避ける意味で「ヲ」が用いられる(柴谷1978)とされていることから、考察の対象外とする。

⁵ H&Tによる他動性の概念は、「目的語の有無によって機械的に決定される概念構造としてではなく、文全体にわたる、文法説明の核心にある関係概念としてとらえ、言語使用の中枢に関わるもの」としている(『現代英文法辞典』1992:1525)。

⁶ H&T(1980)では高い要因と低い要因が共起することはないとするのに対して、角田(2005)では高い要因同士が共起しない場合もあり、他動性の最も高い要因は被作用性であるとしている。

⁷ 本稿では、『現代英文法辞典』(1992)の訳語に従い、volitionalityを「有意志性」、kinesisを「動性」とする。

4. 分 析

4-1. 対象格「ヲ」の意味機能

他動詞から作られる可能動詞には、(20)の「割れる」(21)の「焼ける」のように自動詞と同形で示されるものがある。例えば、(a)の「瓦が割れた」「ケーキが焼けた」ではそれぞれ変化を受ける対象が主語になり、その状態を述べている自動詞構文となる。一方、(b)の「瓦を割れた」「ケーキを焼けた」では、それぞれ「割る」「焼く」の「動作主 (agent)」が明示されていないような場合でも、その存在が認められる他動詞構文の可能表現と判断される⁸。

(20) a. 瓦が割れた。

b. 瓦を割れた。

(21) a. ケーキが焼けた。

b. ケーキを焼けた。

このように他動詞構文の「ヲ」は対象と動詞の格関係を示すだけではなく、文中における動作主の存在、または含意を表すという点から見ても、可能表現が単に状態述語文であるという理由で、対象格「ヲ」が自動的に「ガ」に交替するという説明では十分とはいえない。

次に、可能表現における有意志性について述べ、さらに動性、アスペクトの特徴と被作用性について見ていく。

4-2. 動作主性と被作用性から見た可能表現

4-2-1. 有意志性

動詞には、(22)の他動詞「落とす」や(23)の自動詞「転ぶ」に見られるように、文脈によってそれぞれ(a)の意志動詞にも(b)の無意志動詞にも扱われる場合がある。しかし、可能動詞の場合(24)と(25)では違いが生じ、主体の意図性のない表現では不適切となる。

(22) a. 学校へ行く途中、わざと定期券を落とした。

b. 学校へ行く途中、うっかり定期券を落とした。

(23) a. 自転車に乗っていてわざと転んだ。

b. 自転車に乗っていてうっかり転んだ。

(24) a. 太郎は気づかない振りをして、練習通りうまく財布を落とせた。

b. 太郎はステージの上で、計画通りうまく転べた。

(25) a. *太郎は電車の中でうっかり財布を落とせた。

b. *太郎はステージの上でうっかり転べた。

⁸ 寺村 (1982) では、能動的可能表現 (active potential) と受動的可能表現 (passive potential) に分類している。

以上のことから分かるように、可能表現における有生主体は意図的に動作、行為を行う参与者と考えられる。次に、主体の意図性と動詞の特徴から対象格交替について述べる。

4-2-2. 有意志性と動性

(26)に示した自発を表す知覚動詞「見える」「聞こえる」では、主体は「経験者 (experencer)」となり、他動性の高い要因は関わっていない。この点は、(27)のように状態の変化を表す「～てきた」を用いても同様である。

(26) その時代の人たちには今の人間には見えないものが見え、聞こえないものが聞こえていたのではなかったか。 (老残のたしなみ)

(27) a. バスが急な坂を下りはじめたなと思っていると、不意に向こうに海が見えてきた。

(深夜特急5)

b. すると受話器から予想外のやわらかいイントネーションの日本語が聞こえてきた。

(深夜特急6)

また、独立した自動詞「できる」を用いた(28)でも、(a)の能力を表す状態文と(b)の状態変化を表す文では、どちらも主体の意図性は関与しないことから、対象格にも交替は生じない⁹。しかし、(29)の「できる」に後接する願望表現(a)「～になりたい」では、主語の「太郎」は意味的には受身的な存在であるのに対して、(b)「～したい」では、自らの意図的な働きかけで実現を可能にした能動的な動作主となる。結果、後者の方が意図的で動作的という点で前者より他動性の高い文脈となり、「ヲ」格と共起するようになる¹⁰。

(28) a. 太郎は英語 {が/*を} できる。

b. 太郎は英語 {が/*を} できるようになった。

(29) a. 太郎は英語 {が/?を} できるようになりたいと思っている。

b. 太郎は英語 {?が/を} できるようにしたいと思っている。

(28)(29)に対し、サ変動詞「する」に対応する(30)(31)の「できる」では、後接に「～ておく」のような「事前に準備をする」という意図的な行為を付加した文では、「ヲ」格とも共起しやすくなる¹¹。

(30) a. 休み時間になったら、雑談 {が/*を} できる。

b. 休み時間になったら、雑談 {が/を} できるようにしておく。

⁹ この「できる」は派生形ではないこと、特にサ変動詞と対応しない場合には「ヲ」格が表れにくい(渋谷1994:55-56)。

¹⁰ 例文(29)、(32)～(40)、(43)～(49)、(54)～(57)の対象格の適性については、大学生35名にアンケート調査を行い、判断基準の参考にした。集計結果(自然=2、やや不自然=1、不自然=0)を百分率に換算し、80%以下のものには「?」を付した。

¹¹ 「動名詞+する」型の複合語については、影山(1993)他参照。

- (31) a. いつでも書類の審査 {が/*を} できる。
 b. いつでも書類の審査 {が/を} できるようにしておく。
- (32)の「書く」、(33)の「読む」、(34)の「調べる」のような、動作動詞の可能表現を例に見ても、「～なった」では結果を述べているだけであるのに対し、「～した」では意図的な行為と判断できる。

- (32) (前略)胆嚢炎に苦しんだ二十年前のことも腱鞘炎で字が書けなくなった十年前のことも、最近のことと思ひ込んで、見舞いをいわれたり手紙を下さるのである。(老残のたしなみ)
- (33) a. 太郎は独学でアラビア文字 {が/?を} 読めるようになった。
 b. 太郎は独学でアラビア文字 {?が/を} 読めるようにした。
- (34) a. 誰でも無条件では個人情報 {?が/を} 調べられなくなった。
 b. 誰でも無条件では個人情報 {?が/を} 調べられなくした。

「なる」を先の(14)のように自発的と捉えるか、あるいは(33a)(34a)のように単に状態の変化と捉えるかは、文脈によると考えられるが、(33b)(34b)のように「する」では可能表現においても、他動性の高い要因を表している。

さらに、義務を表す「なければいけない」や、「する」の命令形「しろ」が後接する表現¹²、例えば(35)の「使える」、(36)の「捨てられる」で見ると「ヲ」格が用いられる。

- (35) a. 運転中は、絶対に携帯電話 {?が/を} 使えないようにしなければいけない。
 b. 運転中は、絶対に携帯電話 {?が/を} 使えないようにしろ。
- (36) a. 引越しの前に、不用な物 {?が/を} 捨てられるようにしておかなければいけない。
 b. 引越しの前に、不要な物 {?が/を} 捨てられるようにしておけ。

つまり、動詞の後接表現によって他動性の高さを示しているといえる。先に見た「ガ」格のみとしか共起しない他動性の低い知覚動詞でも、(37)の「見えなくする」という文脈では「ヲ」格も適用される。また、(38)の義務や命令を表す例では、「交通標識を大きくする」、「見える所に移動させる」等の働きかけを表すことから、「ヲ」格との共起も認められるようになると考える。

- (37) 私は限界が見えたら即とば一ゆしてまたさきを見えなくするか、虎の子をもって老人ホームに入る。
 (泣きたいとき)
- (38) a. 通学路の近くでは、どこからでも交通標識 {が/を} 見えるようにしておかなければいけない。
 b. 通学路の近くでは、どこからでも交通標識 {が/を} 見えるようにしろ。

上記の点については、塚本(1987)でも指摘があり、例えば、(39)の自動詞「分かる」に「ヲ」格が適用される理由として、動作主の意志性や行為性を強く表す表現が後接することを挙げてい

¹² 一般に「命令という発話行為は聴者がそれを実行することができる」と話者が仮定している場合に適切に行われる (Searle 1969)」とされている (松本 1998: 45)。

る。また、(40)のような他動詞に possible の接辞を付加した場合でも、(a)の「する」は目的を表す表現で、主体の意志性、行為性を含意することから、対象は「ヲ」格の方が選択されやすい。他方、(b)(c)の「なる」では、主体の意志とは関わらない自然の成り行きを表すことから「ガ」が選択される。

- (39) a. 太郎は (が) 英語 {*が/を} 分かった。
 b. 僕の気持ち {*が/を} 分かってくれ。
- (40) a. 加藤さんがドイツ語 {? ?が/を} 話せるように、私はドイツ人の客をも招待した。
 b. アメリカに長くて、日本語を話す機会が少ないので、(私は) 日本語 {が/? ?を} 話せなくなった¹³。
 c. もうちょっとで、むづかしい数学の問題 {が/*を} 解けそうになった。

(塚本 1987: 141)

以上のような動作主性の高さを表す要因は、一方では対象に与える影響度とも関わっている。

4-2-3. アスペクト的特徴と被作用性

まず、H&T (1980) の他動性におけるアスペクト的特徴 (19c) は、“telic / atelic” という用語で示されているが、これは “perfective / imperfective” に置き換え可能であるとしている¹⁴。例えば、“I am eating.” では動作、行為の終点 (endpoint) が示されていないのに対し、“I ate it up.” では完結性 (telicity) を表すアスペクト的特徴から、他動性の高さを示している。また、被作用性 (19i) とは、例えば、“I drank some of the milk.” と “I drank up the milk.” を比べた場合、後者は「ミルクがなくなった」という意味になり、対象への影響度を表すものである。

対象格と被作用性については、中村 (2004) でも、動作が対象全体へ影響することを強調する場合に「主格—対格」を取ると説明している。例えば、(41a)の「ニ」は「ジョンが店でアルバイト等をしたくて問い合わせたような場合」、(41b)の「ヲ」は「ジョンが店の商品他について調査を行ったというような場合」であるという解釈は、(42)のように副詞 (句)「隅々まで」を埋め込んでみると、その違いが現れると述べている。

- (41) a. ジョンが別の店にあたった。
 b. ジョンが別の店をあたった。
- (42) a. ? ? ジョンが別の店に電話で隅々まであたった。
 b. ジョンが別の店を電話で隅々まであたった。

(中村 2004: 173)

¹³ 久野 (1983: 150) では、可能表現の「(ラ)レル」と「デキル」の意味的な違いの例として(40b)を挙げているが、対象格の違いも含めて考察する必要がある。

¹⁴ 山本 (2002) では、“telic / atelic” を「意味的 (非) 完了相」としている。また、井上 (1976b: 153) では「完了相」と「完結相」は区別しなければならないとしている。「もう宿題をした」は単なる完了を表し、「もう宿題をしてしまった」では「残りなく終わった」という完結を表す。

完結を表すアスペクトの特徴は、(43)の「殺す」や(44)の「殴る」等の他動性の高い動詞、また(45)の「書く」、(46)の「終える」に後接する「～てしまう」表現、さらに(47)の「染める」、(48)の「溶かす」、(49)の「崩す」等の副詞(句)を付加した結果構文でも示される¹⁵。このような文脈では結果として、被作用性の高さを表すことになり、「ヲ」格との共起が認められる。

- (43) 保健所だからといって、いつでも野良犬 {?が/を} 殺せるわけではない。
 (44) プロボクサーのパンチは凶器になるので、一般人 {?が/を} 殴れない。
 (45) 計画より早くレポート {?が/を} 書いてしまって、良かった。
 (46) 危ない、危ないという声がどこからか聞こえてきた。このままでは永遠に汐どきを失ってしまうぞ、と。永遠に旅を終えられなくなってしまうぞ、と。(深夜特急6)
 (47) 校則で学生は髪 {?が/を} (茶色に) 染められない。
 (48) 冬の間は、カチンカチンに凍った氷柱 {?が/を} (完全には) 溶かせない。
 (49) 解体業者は一日で、半壊の建物 {?が/を} (すっかり) 崩せた。

また、(50)の「遊ばせる」のような自動詞の使役文では、一般に「ニ」は許容使役、「ヲ」は強制使役が知られている¹⁶。しかし、(51)における可能の接辞を付加した「遊ばせられない」のように、「遊ばせることができない」という意味では、被使役者である「子供」の意向は排除される。その結果、「子供は遊べない」というように、被作用性は高くなり「ヲ」格のみの適用となる。

- (50) 公園で子供 {に/を} 遊ばせる。
 (51) 事件が解決するまでは、公園で子供 {*に/を} 遊ばせられない。

対象への影響度という点について、さらに田村(1996)の調査結果では、対象格に「ガ」を取りにくい例として、完遂を表す「～きる」を後項に持つ統語的複合動詞「おさえきる、かくしきる、こらえきる、ささえきる、たちきる、まちきる」を挙げている¹⁷。「～きる」は否定形になると、(52)(53)のように他動詞と自動詞では異なり、「他動詞+きる」は継続動詞、意志動詞の否定は「～きれない」という可能の否定形が用いられる¹⁸。

- (52) a. 小説を読みきる。
 b. 小説を {読みきれない/*読みきらない}。
 (53) a. (夜が) 明ける。

¹⁵ 仁田(2002)では、結果の副詞を取る動詞は、動きが実現・完了した後に(他動詞であれば対象に、自動詞であれば主体に)変化が生じる、という結果の局面を有する動詞で、いわゆる telic (限界的) と呼ばれる動詞でもあるとしている。

¹⁶ 場所理論では、「ニ使役」構文に現れる「ニ」は、本来「起点」であるはずのところに「到達点」の表示が代用されている(池上1981)。

¹⁷ 田村(1992, 1996)では、小説を資料とした対象格と動詞の分布状況について調査している。

¹⁸ 渋谷(1993:205)では、九州東部方言「～きる」は、「ある(意志的)な動作を最後までやり遂げる(完遂する)」というもとの意味が転じて、動作主体のその動作をやり遂げる能力の方に注目する能力可能形式になったものと考えられるとしている。

b. (夜が) 明けきらない。

(54)の「～きれない」だけではなく、完遂を表す複合動詞として(55)の「～ほせない」、(56)の「～つくせない」、(57)の「～こめない」を例に見ても、「ヲ」格との共起が自然であると思われる。

(54) ゴール後、夫の腕の腕に抱きかかえられた晴美は、初めて涙を見せた。そして、腕もまたあふれる涙をこらえきれなかった。(女子マラソン)

(55) 量が多すぎて、太郎は歓迎会のビール {?が/を} 飲みほせなかった。

(56) 話が速すぎて、聴衆は講演の内容 {?が/を} 書きつくせなかった。

(57) 太郎は胃のレントゲン検査の前に、バリウム {?が/を} (一気に) 飲み込めなかった。

次の(58)から(60)のような慣用的な表現においても「ガ」格には交替しないが、アスペクト的な特徴から被作用性の高さに関っている。

(58) 背中に日用品を詰めたリュックサックを背負い、両手に餅や野菜や魚の生乾しなど {*が/を} 掲げられるだけ掲げている。(老兵は死なず)

(59) 昼食はバイキング形式だったので、選手は好きな物 {*が/を} 食べられるだけ食べた。

(60) 地震で被害を受けた人達のために、みんなで寄付金 {*が/を} 集められるだけ集めた。

以上、他動性の要因から可能表現の対象格標示交替について見てきた。結果、「ヲ」格の適用は、参与者である動作主性と被作用性双方に関する要因、有意志性と動性、さらに、アスペクト的特徴によって示される要因に帰着する。

5. ま と め

本稿では、可能表現の対象格標示「ガ」「ヲ」の交替に関わる制約について、他動性の要因から考察した。結果、有意志性、動性、アスペクト的特徴において高い他動性を示す場合、状態述語文である可能表現でも「ヲ」格と共起するようになることが分かった。塚本(1987)では、「格支配体制は動詞だけで決まるのではなく、動詞に後続する語句による意志性・行為性有無という意味的な要因が格支配に影響を及ぼす(p. 142)」と述べている。このような要因は、可能表現だけではなく好悪表現や願望表現にも共通点が見られることから、日本語の初級者用のテキストにあるような提示の仕方、それに付随した各練習問題の取り扱い方にも、検討が求められる。また、可能表現の対象格標示について、主体と対象という参加者の特徴から見た結果、他動性の要因(表2)には、先行研究で述べたような意味的要因の重複性や、動作主性や被作用性双方の低位分類等からの検討も必要であると考えられる。

謝 辞

本論をまとめるにあたり、査読委員の方々から貴重なコメントを頂いたことに謝意を表したい。尚、本論の不備は全て筆者の責任によるものである。

参 考 文 献

- 庵 功雄 (1995) 「ガ～シタイとヲ～シタイ格表示のゆれに関する一考察」『日本語教育』86, 日本語教育学会, 52-64.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 井上和子 (1976a) 『変形文法と日本語 上』大修館書店
- (1976b) 『変形文法と日本語 下』大修館書店
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 渋谷勝巳 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1.
- (1994) 「可能文における格パタンの変遷」『阪大日本語研究』6, 大阪大学文学部日本学科(言語系), 53-75.
- 田村泰男 (1992) 「可能表現における対象格マーカー「が」「を」について—小説における実態調査—」『広島大学留学生センター紀要』2, 11-21.
- (1996) 「現代日本語の可能文における目的語マーカー「が」「を」について(2)」『広島大学留学生センター紀要』6, 13-26.
- 塚本秀樹 (1987) 「日本語における複合動詞と格支配」小泉保教授還暦記念論文集編集委員会編『言語学の視界—小泉保教授還暦記念論文集』大学書林, 127-144.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- (2005) 「他動性の研究の歴史と今後の期待」『言語』34-8, 大修館書店, 51-57.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味第1巻』くろしお出版
- 中村 渉 (2004) 「他動性と構文Ⅰ: プロトタイプ, 拡張, スキーマ」中村芳久編『認知文法論Ⅱ』大修館書店, 169-204.
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 牧野成一 (1978) 『ことばと空間』東海大学出版会
- (1996) 『ウチとソトの言語文化—文法を文化で切る—』アルク
- 松本 曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 37-83.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房
- 山本英一 (2002) 『「順序づけ」と「なとり」の意味論・語用論』関西大学出版部
- Givón, T. (1995) *Functionalism and Grammar*. John Benjamins Publishing Company.
- Hopper, P.J., and S.A. Thompson. (1980) Transitivity in grammar and discourse, *Language*, Vol. 56-2, 251-299.
- Jacobsen, W.M. (1992) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kuroshio Publishers.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*. The MIT Press.
- Makino, S. (1975-76) On the nature of the Japanese potential constructions. *Papers in Japanese Linguistics* 4, 97-124.
- McGloin, N.H. (1989) *A Students' Guide to Japanese Grammar*. 大修館書店
- Searle, J.R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. London: Cambridge University Press.

Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

『現代英文法辞典』(1992) 荒木一雄・安井稔編 三省堂

参考テキスト

1. 『日本語初歩』(1981) 国際交流基金著 凡人社
2. 『初級日本語』(1994) 東京外国語大学附属日本語学校編著 凡人社
3. 『みんなの日本語初級 I・II』(1998) スリーエーネットワーク編著 スリーエーネットワーク
4. 『初級日本語げんき I・II』(1999) 坂野永理・大野裕・坂根康子・品川恭子著 The Japan Times.
5. 『新文化初級日本語 I・II』(2000) 文化外国語専門学校日本語課程編著 凡人社
6. 『新装版日本語初級 I・II』(2002) 東海大学留学生教育センター編 東海大学出版会
7. 『Intensive Course in Japanese Elementary Dialogues and Drills Part1・2』(1971) 対外日本語教育振興会日本語テープ編集委員会 ランゲージ・サービス
8. 『Japanese for Busy People I』(1984), 『Japanese for Busy People II』(1990) Association for Japanese-Language Teaching. Kodansha International LTD.
9. 『An Introduction to Modern Japanese』(1987) 25th printing. The Japan Times.
10. 『Situational Functional Japanese Volume1・2 Notes』(1991) 筑波ランゲージグループ著 凡人社

引用例

「女子マラソンに賭けた夢 私は走る」(2000) 新潮社 / 「深夜特急 5」「深夜特急 6」(1994) 新潮社 / 「泣きたいときだ誰がそばにいるの」(1993) PHP 研究所 / 「老残のたしなみ日々は上機嫌」(2003) 集英社文庫 / 「老兵は死なず」(1985) 読売新聞社